

離島でのノートPCとポケットWi-Fiによるライブ中継：統合実習 岡山県立大学保健福祉学部看護学科



1. 実習の実際

科目の概要

本学の統合実習のねらい：地域包括ケアシステムにおける看護機能の充実を図るための「看護の質の管理及び改善への取り組み」について考察し、看護を創造するための基礎となる能力を育成すること

実習目的：統合実習A（集団・組織レベル）：看護管理の立場から、各実習施設における看護管理の現状を明らかにし、解決案を立てる
統合実習B（地域レベル）：生活者・当事者の視点から、2次保健医療圏域との関連において地域包括ケアシステムにおける看護の在り方を考える

従来の実施方法：岡山県笠岡諸島の北木島での1泊2日の宿泊実習を中心とする活動（学生20人1班で2クール実施）
関係機関：2次保健医療圏域の管轄保健所、笠岡市、笠岡諸島を拠点とするNPO法人（かさおか島づくり海社）
内容：島の地区踏査、島民へのインタビュー、行政・民生委員等へのインタビューなどを実施して、自分たちが考える島の健康課題と、それに対する対策案をプレゼンし、島民・関係者とのディスカッション。臨地実習前後での保健所所長などからの2次保健医療圏域の実態についての講義。



臨地での学習の可否の背景

島の人口780人、高齢化率70%↑、島には常駐する医療者がいない中で、若者・島外者の訪問による新型コロナウイルス感染症への懸念と、島民感情（不安）への配慮。また、発生した場合、被害の深刻さが想定されたため。

- 宿泊実習……3密が避けられない ✕
- ↓
- 代替えとしての日帰り案……島内では3密は避けられるが、移動時の交通機関・船舶等での3密が懸念 ✕
- ↓
- 教員だけで現地入りしてリモート中継することとした



従来の実習の様子

今年度の実施方法・内容

担当教員：2名

方法：教員がノートPCとWi-Fiを持参して島に渡り、現地の4カ所の地点からライブ中継してディスカッション
各中継場所からの会議時間は60～90分程度、2日間に分けて実施
学生は2日間とも自宅からWebで参加 (Microsoft Teamsを利用)

中継場所：①笠岡市北木島 NPO法人事務所（島民、民生委員、愛育委員、NPO代表者など6名）
（参加者）②笠岡市真鍋島 真鍋島診療所（看護師1名）
③笠岡市真鍋島 デイサービス施設（島民のサービス利用5名、スタッフ3名）
④笠岡市本土 市役所会議室（保健師1名）

学生からの質問：島民の方々に対して

- ・島で住んでいて不安だったり困ったりすること・それでも住み続ける理由は？
- ・島での生活の良さは何か？
- ・島の医療の満足度・島で緊急時にすぐに診てくれずに困ったことは？医療者に求めることは？
- ・災害への備え、島民の認識は？
- ・島での地域連携について（退院後どうやって島の生活に戻るのか？）
- ・コロナウイルスでの生活の変化は、物品の不足や困っていることは？
- ・島民同士の関り、どのような関りがあるのか？
- ・島のスーパーでどんなものが売っているのか？不便はないのか？
- ・島がメディアで有名になってストレスは無いのか？（お笑いコンビ千鳥の出身の島） など

学生からの質問：保健師・看護師に対して

- ・島民の健康状況、高齢化の状況、島民の健康維持のために行っていることは？
- ・緊急時や急変が予測される場合の、病院と地域の連携はどうやっているのか？
- ・診療所が開いていない日や、時間外、船が動いていない時の急病者はどうしているのか？
- ・保健師として島民とかかわることで良かったと思う事は、やりがいは？ など



今年度のWebリモート実習の様子

学修目標と学生の目標への到達具合

目標：①地域特性や健康課題をふまえて、生活者・当事者の視点から地域包括システムにおける看護の課題（テーマ）を特定する

②テーマを深めるあるいは課題解決に向けてどのような実践をすればよいのかを説明する

到達具合（学生の事前・事後レポートで評価）

①について：例年と同じ程度の看護課題の特定ができており、ほぼ達成

- ・離島という環境は、そこでの生活課題が見えやすい
- ・学生のレディネスがあった（3年時の「看護政策マネジメント論」の授業で、先輩の統合実習Bの報告会に参加し、北木島の地域課題の検討をしている為一定のイメージがあった）
- ・保健師、看護師のリアルな話が聞け、直接意見交換ができたこと

②について：具体性や実践可能な提案が少なく不十分

- ・例年なら1泊2日ではあるが、離島でのリアルな生活体験も踏まえて考えられたが、今回はWeb会議でのディスカッションのみであったこと。
- ・現地で学生なりの「提案」をプレゼンし、島民からの意見をもらって、更に考えるというステップを踏んでいたが、今回はそのフィードバックの機会が持てなかった。



今年度のWebリモート実習の様子

実習上の工夫

ライブ当日までの事前学習

①学内実習 Microsoft Teamsを利用したグループワークでレディネスを上げておく

- ・3年時の政策マネジメント論時のGWのメンバーで、6つの実習グループを組み、島民・医療関係者への質問項目の検討や事前学習をした
- ・島へのイメージが湧くような資料の提供（You Tube動画の紹介、市の島観光パンフレット・NPOのパンフレットの等の配布、前年度の実習風景の画像集作成

②島をよく知っているNPO法人との連携調整

- ・事前に学生からの質問事項を現地に送り、それに答えてくれそうな島民を探してもらった（島のNPOと連携しながらコーディネート）

ライブ当日

①双方向の会話になるよう現地側にも学生名のリストや質問事項を紙面でも配布

②学生には各グループリーダーが中心となって、主体的にディスカッションをするよう促す

2. 実習を終えての所感

従来の実習との異同（学生のレポート内容から）

同じと考えるもの：看護の対象を地域の生活者としてとらえて看護に活かしていくことの学び

- ・学生は離島に対する一般的なネガティブイメージ（不便な環境、そこで我慢して暮らしている等）が当初主流を占めているが、生き生きと暮らしている島民たちをみて、自分たちの価値観（便利か、不便かという視点など）では測れない「人の暮らし」に気づく学びがあった
- ・対象を医療的な面だけでなく、地域の生活者としてとらえて看護に活かしていくことの学びがあった
- ・島民の生活ニーズを通して、地域の中での自助・互助と健康課題との関連への気づきがあった

足りなかったと思うもの：自分たちが看護職として地域資源となり、医療を担っていくという視野の広がり

- ・広域で見た医療政策・医療体制等の気づきのレポートが少ない。
コロナ禍で保健所からの実習協力が得られず、この部分のカバーが今回の実習内容では不十分であったと考える。

有意義な実習を導いた要素

- ①学生が、島や島の生活に興味を持てるように、イメージしやすい画像を中心としたコンテンツを集めて提供した
- ②島民らが積極的に参加してくれたこと（島のNPOが大学の実習目的を理解して関わってくれた）

これまで6年間の離島実習の実績＝大学と、島民・NPO、保健師らとの良好な関係性があったためと考える

学修に差が生じた場合の補完方法

リモート参加なので欠席は無かったが、ネット環境のトラブルで聞き逃しの訴え



- ・保健師・看護師とのディスカッションは録画して、後日の閲覧が可能とした
- ・実習グループ内で、足りない情報は補うよう促した



従来の実習の様子